

システム言語学とその科学性

金蘭短期大学 三石博行

0. はじめに

1. レビ・ストロースの構造主義文化人類学、ヒアジェの発生心理学、フロイト・ラカンの精神分析学やフーコの認識論など、現代の人間学の土台にソシュールの構造主義言語学が位置していることは疑えない。しかし、言語学を人間学の基礎論として語ることは、一般化している訳ではない。この理由の一つに言語学の現状がある。言語の課題は、人間と社会の全てに渉るため、言語研究は広大がテーマを持ち込む。地球上の民族や部族のことばの研究、それも過去使われていたことばと現在のことばを含め、それらの音声、統辞や意味の側面から研究すると、語学の課題一つをとっても非常に多くのテーマがある。さらに、社会言語学、認知言語学、発達言語学、脳神経言語学、等々、その課題は非常に多く、到底、一人の研究者の研究能力を越えて言語に関する課題は広がっている。つまり、この事実は、ことばの理解が人間と社会の理解であるという事を示しているのである。
2. また、他方では、吉田民人の言う人工物プログラム科学基礎論としてのシンボル記号学と語ることもできる。それは、人工生産物までの形態は機能を前提としていると言うことは、人間的な意志や目的によって人工生産物の構造が決定されているということである。言い換えると、自然資源の加工過程とは、それら言語的意味を所有させる過程であり、そのことによって形態が発生し機能性が所有されることになる。全ての人工生産物の形態、つまり構造は言語によって構造化されている事を意味するのである。人工物プログラムは言語、シンボル記号であるとすれば、言語学はこれら人工生産物にも、その形態のコードの解明、記号論的、統辞論的、意味論的な分析を加えることができるのだろうという問題がさらに発生している。
3. システム言語学は、これまでの言語学と人工物プログラム科学の二つの課題を統一的に取り上げることのできる理論を提起するために試みられたものである。その為には、一般言語学と人工物プログラム科学のシンボル記号論の接点を確立する必要があった。この試みは、丸山言語学と吉田人工物プログラム科学の科学認識論の点検によって試みられた。この試みの中で、丸山言語学の科学認識を構築している現象学、構造主義やポスト構造主義的な主客二元論批判、素朴实在論批判は前提条件である。しかし、吉田人工物プログラム科学は、シグナル記号によって構成される物質世界の实在性を前提にしている。この二つのシステム論の統一的論理を模索するためには、二つの言語学の認識論的点検を行う必要がある。

1. システム言語学提案の過程

1-1. 言語学研究の経過

言語学研究は具体的にフランス語表現方法を伝統的な語学や言語統計にしたがって分析し、意味論や統辞論的な分類方法を活用して、表現方法の研究を実証的な方法を用いて進めた。フランス語表現方法の研究からシステム言語学を提案するために、これまで研究発表してきた言語学、特にフランス語を中心とした研究の経過を以下に示す。

1. “Sur les expressions logiques d`opposition dans la langue française” (仏文) in 『金蘭短期大学研究誌』、第 28 号、大阪、pp153-183, 1997.12、ISSN 0287-0487、(共著 VAN DROM Eddy)
2. 「フランス語表現の Existence の構造について」(単独発表)、in 『1998 年 日本フランス語フランス文学会春季大会 研究発表要旨』、成城大学、東京、1998.5 36p、(共著 VAN DROM Eddy)
3. 「フランス語表現の基盤にある Parole 構造について」 in 『フランス語フランス文学研究』、No73、白水社、東京、p108、1998.10、(共著 VAN DROM Eddy)
4. 「Sur le modèle logique dans la langue française」、(単独発表) in 『1998 年 日本フランス語フランス文学会秋季大会 研究発表要旨』、大阪大学、大阪、1998.10、p7、(共著 VAN DROM Eddy)
5. “ Exemples concrets du modèle de langue dans la langue française” (仏文)、『金蘭短期大学研究誌』、第 29 号、大阪、1998.12、pp61-79、(共著 VAN DROM Eddy)
6. 「Approche linguistique de la causalité dans la langue française」(共同 VAN DROM Eddy) (仏文) in 『1999 年 日本フランス語フランス文学会秋季大会 研究発表要旨』、愛媛大学、松山、1999.10、p3。(共著 VAN DROM Eddy)
7. 「フランス語におけるパロールから象徴的意味・前論理的表現への過程について」(単独発表) in 『フランス語フランス文学』、No74、白水社、東京、1999.10、p121、(共著 VAN DROM Eddy)
8. 「Analyse du domaine linguistique de l'intention dans les expressions françaises 」(仏文) (単独発表) in 『1999 年度日本フランス語フランス文学会関西支部大会 研究発表要旨』、関西学院大学、西宮、1999.11、p2、(共著 VAN DROM Eddy)
9. “ Classification des Principaux Marqueurs Exprimant la Causalité” (仏文)、in 『金蘭短期大学研究誌』、第 30 号、大阪、pp75-98、1999.12、(共著)
10. 「フランス語の讓歩表現の文語的及び口語的ニュアンスの統計分析」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第 30 号、大阪、大阪、pp99-115、1999.12、(共著 VAN DROM Eddy)
11. 「目的 (but)・ afin de の表現に関する意味論的分析」 in 『関西フランス語フランス文学』、第 6 号、青山社、京都、2000.3、pp59-60 ISSN1341-433x、(共著 VAN DROM Eddy)
12. 「CORPUS による検索と質的変動指標による口語及び文語表現の傾向分析」、(単独発表) in 『2000 年 日本フランス語フランス文学会春季大会 研究発表要旨』、明治学院大学、東京、2000.5、p17、(共著 VAN DROM Eddy)
13. 「時空間的表現から因果的表現方法への移行に関する考察」 in 『フランス語フラン

- ス文学研究』、No75、白水社、東京、2000.10. (共著 VAN DROM Eddy)
14. 「CORPUS による検索、質的変動指数と信頼係数 q による口語/文語表現傾向分析方法」、(単独発表) in 『フランス語フランス文学研究』、No75、白水社、東京、2000.10.、(共著 VAN DROM Eddy)
 15. 「フランス語表現方法に於ける精神言語活動・Langage の構造について —システム言語学への試論」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第 31 号、大阪、pp95-124、2000.12、ISSN 0287-0487 、(共著 VAN DROM Eddy)
 16. 「意図(intention)・主体的目的(but)や達成的目的(destination)を示すフランス語表現に関する分析 —システム言語学モデルの検証のための試論(1)—」 in 『金蘭短期大学研究誌』、第 31 号、大阪、pp73-94、2000.12、ISSN 0287-0487、(共著 VAN DROM Eddy)

1-2、フランス語表現方法の語学モデルとその限界

- 1、語学としてのフランス語表現に関する研究は、ソシュール言語学の定義によれば、ラングについての言語学であると考えられる。フランス語表現に関する研究はフランス語学の一分野として位置づけられるのが一般的である。我々は、表現方法の要素の分類を進める中で、フランス語の表現は大別して三つの要素からなる事に気付いた。その一つ目が表現を構成している論理的構造で、さらに二つ目が話し手の立場から生じる表現方法、そして三つ目が幾つかの文のなかである決まった句を用いたり、また文脈の論理的関係から生じる表現である。それらの三つの要素の組み合わせから、全てのことばはでき上がり、多様な表現を可能にしていく。
- 2、二つ目の話し手の立場による表現方法・法性とは話し手の主観的な意図やその立場を示す仕方で、文法的手段によって表現される話し手の心理的態度立場による表現方法である。この表現方法を法性と呼ぶ。この Modalités、法性はさらに四つの表現方法に分類される。一番目は客観的な表現方法、二番目は主観的な表現方法、三番目は指示的な表現方法、そして四番目は確信的な表現方法である。
- 3、二つ目の論理的関係から導かれる表現方法は一般的に構文の表現を構築している基本となっている。今まで、表現方法について語られたものは、この論理的関係から導かれる表現方法を意味する。それらの構造は極めて明確な表現の手段、つまり決まった言い回しとか句によって構成されている。そしてそれらの言い回しが論理的な意味を持つことになる。我々は、論理的な意味に即して、それらの表現の手段である言い回しを分類した。そして、以下の表 2 で示すように 15 の形式による類説的表現形態による表現方法とは、ことばの表現が、一つの文としてだけでなく、複数の文の構成やその流れによって成立しているため、前後の文脈の中や話しの中で、幾つかの決まり文句や慣用的な句を用いることによって文脈から表現が生み出されることをいう。
- 4、以上のフランス語の表現方法を構成する要素は、それぞれが組合わされることによって一つの文やことばとしての表現を形成すると考えられる。したがって、その構造は以下に示す、三つの要素の組み合わせモデルとして示すことができる。その三つの要素からラングの通時的継続モデルができる。
- 5、

6. 以上述べてきた表現方法の分類に関するモデルやラングの通時的継続モデルで、フランス語の表現について語ろうとすると、次に挙げる二つの問題にぶつかる。第一点目は、表現の形式は、テキスト全体の文章の流れとかスタイルと呼ばれる、一つの文を取り巻く文の環境によって決定されているという事実である。第二点目の問題は、ラングの通時継続モデルのエンジンについての課題から生じる。語学的な構造の説明のみから、つまり文化的な規則の構造の解明からだけでは、語り続ける主体の問題、ラングの通時的継続モデルは説明できない。ラングの通時的継続構造が確立するためには、語る主体や聞く主体がもう一方で問題になる。これまで述べてきたラングの構造モデルから、コミュニケーションの自己組織系の道具としてある言語表現の在り方を語ることは、既に限界に達したことに気づく。つまり言語活動主体の問題は、ラングの分析からのみでは解決できないので、ソシュールの定義するランガージュについて問題を立ててみた。言語表現過程では、次の表現を持ちだす主体の意図や欲望がその土台にある。

1-3、言語活動の構造モデルとシステム論的解釈

1. ことばも遺伝子と同じようにその増殖過程でコピーの誤りや、勝手に意味するものや意味されるものを作りだす。これを言語の通時的な構造の変化と呼ぶ。この自然発生的な構造変化を野放しにしていては、コミュニケーションは不可能となる。その変形されたものを修正するために、交換可能な生産物の基準を登録するか、再登録する必要がある。つまり、他者とのコミュニケーションに対して「意味しないもの」を「意味するもの」に修正するためには、文化的規範と呼ばれるマニュアルに従って、壊れた音やつけ間違った音を正しい音に取り換えなければならない。つまり、異物を排除する免疫機能が存在しなければ、生体は生命を自己保存することができないように、自然発生する「意味しないもの」を排除する機能が必要である。本来その自然発生の原因となったナルチシズム的な自我の内部に構築することはできない。その為、外にその機能を作りだす必要が生じた。それが文化的規範と呼ばれる社会身体の中にある免疫機能である。この社会身体の規範の代表的なものとしてラングがある。ラングは自我の言語活動・ランガージュ活動の中で勝手に増殖していく通時的言語構造の変化を厳しくチェックし、意味されるものと意味するものの関係を正す。文化的生産物であるラングを際限なく自我内部に登録しつづけることで、文化的規範は自我に登録され、ナルチシズム的な機能で作用するエスの活動に対して抑制力を働かせる事ができる。自我は、そのため現実則と呼ばれる、最も少ない精神エネルギーで他者とのコミュニケーションを可能にする方法を身に付けるのである。
2. 語る行為とは、ラングとランガージュの繰り返しによって作り出されている。言語活動・ランガージュの構造モデルを考えるとき、言語化とは表現しようとする主体がその表現しようとする欲望を、表現する手段つまり句や単語とか文法と言う道具を使って実現する過程を意味するので、表現方法に関するモデルは表現方法の言語的規則によって成り立つ共時的な構造と、表現しようとする主体の通時

的な精神構造の二つのモデルの組み合わせによってでき上がっているという概念が前提となっている。そのモデルをラングとランガージュの繰り返しモデルと言う。

3. ランガージュを構成する 5 つの要素がある。第一の要素は表現しようとする欲望の質を肯定と否定との二つの局面をもつ極性という要素である。第二の要素は、質と名づけた自己と非自己の区分からはじまり、表現する主体と表現される対象の質的差異を決定する要素である。第三番目は自己の内部とそれ以外を区別することによって生みだされる「ここ」と「ここでない」という空間の要素である。第四の要素は時間の要素である。第五番目は量に関する要素で、これはランガージュの要素のもっとも進化した形態を取っている。何故なら、質的要素が前提にあり、その上それらの比較がなければ量の概念は生じないからである。
4. 以上の五つの要素が組み合わされて、言語活動・ランガージュを構成するモデルが作られると考える。それらの要素は、今ここでは平行して並べられたが、それらは同時に自我機能の発生的過程の中で生じる精神エネルギーの作用要素と精神構造の機能要素の分離発生過程を意味する。従ってここで言う極性 P は快・不快や否定・肯定と言う精神作用要素を表現するものであるので、自我の構造化を推し進める起動力であり、精神エネルギーのベクトルを意味する作用的要素として解釈できる。また、質、空間、時間や量は精神構造の在り方を示す機能的要素として考えられ、自我の構造の基礎を構築する。この言語活動・ランガージュの構造過程のモデルを示した。

2、システム言語学の仮説について

2-1、言語活動の発生論的解釈

1. 言語発生の第一段階では自我は自己と対象の分別がつかない状態が仮定される。この段階から言語活動としての自我が発生し、それはさらに言語を登録しつづける。この言語習得は生命を維持するための個体保存の行為である。生きるために他者に自己の欲求を正しく伝えなければならない。ことばという文化的な産物によって文化的な規範が自我を構造化する。言語化によって新たな第二段階の自我の形成が始まる。
2. ことばの習得や母とのコミュニケーションが可能になる段階を精神分析では肛門期・半対象期と呼んだ。この時期から文化的な規範、つまり自己性欲や近親相姦のタブーが言語を通じて自我に登録される。しかし、それらのタブーを言い渡す超自我は対象化されていない。半対象的な世界つまり自我が自我を容赦なく攻撃することになることを、メライン・クラインは前エディプス期の超自我による幼児の夢分析から分析した。
3. 極性、空間、時間、質、量の五つの要素はそれぞれ進化し、無意識状態から前意識状態を形成する。論理的表現は、極めて発達した言語形態である。
4. ここで、無意識の言語活動の 5 つの基本要素、極性、空間、時間、質、量を仮定

した。この要素によって、表現形態の基本構造が説明されなければならない。そこで、我々は、さらに、表現方法に関する語学研究の中で、例えば、意図・主体的目的や達成的目的を示すフランス語表現に関する分析で、その理論を実証し続けている。

2-2、吉田人工物システム科学原論と丸山言語学の接点

- 1、吉田民人は自己組織系の情報科学の理論を一般化し、情報界と資源界からなる人間社会のすべてを対象とするシステム論を人工物システム科学として提案している。その科学理論が展開する「法則領域」、「Signal プログラム領域」と「Symbol プログラム領域」と「それぞれの境界・初期条件」からなる「三層システム理論」提案している。そこで、我々の進めたシステム言語学の構築の作業を、吉田民人の人間社会学の基礎理論としての「人工物システム科学原論」の提案に照らし合わせながら、自己組織系の情報科学としてシステム言語学の成立する条件を検討する。
- 2、システム論的言語学の起原は、筆者が 1993 年に発表したフロイト精神分析学のシステム論的解釈、つまり自我の構造を抑制と欲動から生じる精神エネルギー的対立関係から生み出される運動状態のバランス形態とする解釈がある。
- 3、また、システム論的言語学の土台に、丸山圭三郎がソシュール言語学の分析や解釈から導き出だした丸山言語学の基本概念を構成する「生の円環運動」がある
- 4、この丸山言語学が示す「生の円環運動」を前提にし、吉田民人の自己組織系の情報科学としてのシステム言語学を構想する。自然言語系は吉田民人によると「狭義の情報」と定義されている。その秩序プログラムは「シンボルプログラム領域」に属することになる。このプログラムによって処理された世界・人工物が、社会的人工物、つまり家族、企業、国家、国連などの社会・経済システムや精神的人工物、つまり科学的知識、価値観、宗教、文学、芸術などの文化システムであると吉田民人は述べている。これらの人工物は自然言語によって作り出されたある文明や歴史に依拠した価値・表象・言語の体系、つまり共同主觀・イデオロギーを構成する。それが、超自我とよばれる文化的抑圧の構造、つまり制度や規範を作り出し、その文化的記号・シグナルによって、自我は言語情報を処理するプログラムを形成し、自我の構造を作り出すのである。その自我の構造によって、入力される情報は処理され、処理された情報によって、人工物が再生産される。丸山圭三郎も、図 6 に示すように、「生の円環運動」を提起することで、吉田民人と同様にを文化的シンボルと文化的シグナルの相互の運動を示している。

2-3、ランガージュとラングの回帰運動

- 1、システム論的言語学の視点は、言語学の課題がいわゆることばの構造を語学的分析に留めないことを前提にして、言語学の課題をコトバ・ランガージュ・言語精神活動の課題にまで展開しているところにある。文化的シグナルと文化的シンボル化の相互の循環の過程に関する分析は、ことばの分析が統辞的・意味論的分析に留まらないことを示唆している。マルクス・廣松涉が指摘した商品の物象化の

過程が課題になる。生産された文化的象徴はそのシグナルを所有することで、生産物の具象性から解放され、欲望の対象物としての商品に化ける。そして、この化身こそ交換過程の原動力として機能するのである。

2. ことば・文化的記号という文化的に生産された交換物に指示されたものとコトバ・自我の精神活動と呼ばれる文化的観念形態との相補的関係が、二つの概念の運動形態、つまりここでいうシステムとして存在することによって説明可能であることが、システム言語学の成立の条件となっている。その形態は言語精神活動から象徴的意味の成立過程を経て文化構造・言語化の過程に至る経過を意味する。この過程は、まず言語活動が第一過程精神活動の中で、ナルチシズムによって導かれる欲動活動として発生する。その無意識や深層での精神言語活動は欲望の対象の象徴的意味に連結しながら、文化的規範や現実則に即して、コミュニケーション可能なことばとして昇華される。コトバがことばになる過程には抑制する超自我の存在が必要である。それは、社会的規範や規則の存在と合同関係にあると考えてよい。
3. 事象的世界からのメッセージ、つまり表象や指示のシグナルに対する自我の従属的生活態度・実践的惰性態が形成されている。我々を取り巻く生活世界は過去のそして現在の人間の労働によって生産されたものの蓄積によって構造化された世界、つまり吉田民人のいう人工物の世界である。我々は好むと好まざるに関わらず、自我を保存し、生存している以上、人工物の世界に守られて生きなければならない。その人工物とは、蓄積物・文化や社会資本と呼ばれる過去の労働であり、それらが現実に文化的社会的機能として働いている以上、それらの生産物の意味やシンボルは、その事象の指示としてもしくは表象としてシグナルを発し続けている。これらの人工物の機能と構造のシグナルを情報とよぶ。つまり人工物の資源の文化的社会的観念形態・パターンがその情報の形態なのである。言い替えると、人工物とはそれが文化的社会的機能性をもつ以上、そしてその機能性が取り出される以上、そこでその人工物の指示は「意味するもの」として登場することになる。
4. これらのシステム言語学で示されるランガージュとラングの回帰運動は、生命活動系の中での神経系情報活動と欲動活動の回帰運動を土台にして成り立ち、またこの回帰運動もさらに物理・化学的運動系の中での個体の誕生と死の回帰活動を土台にして成り立つ。そこで、システム言語学の成立条件に関するモデルを示した。つまり、システム言語学成立条件である三つの自己組織系の連鎖運動が提案される。第一層は社会文化活動領域を支配する自己組織運動、第二層は生命活動領域を支配する自己組織運動、そして第三層は物理・化学的活動領域のエネルギー変換の法則を前提として成立している熱力学第一法則・エネルギー不変の法則である。これらは、相互に関連し合いながらも、それらの三つの層自体が独自に自己組織的な回帰運動を行っている。この三層の連鎖のモデルを前提にして自己組織系の言語学が成立していると考える。

5、システム言語学、つまり自然言語系プログラム科学基礎論の形成に向けた学際的研究が前提になっている。

3、システム言語学の科学性の分析

3-1、社会身体は言語のように(によって)構造化されている。

- 1、社会文化現象は、社会文化素材と社会文化様式によって構成されている社会文化資源と、その社会文化資源を活用する社会文化主体(地域社会や家族を構成する生活者や企業、公共団体や社会組織を構成する社会人)と、それら二つのパターン(社会文化情報)によって作られている。言い換えると、社会文化現象は過去の労働の産物である人工物としての資源と、現在の労働過程つまり人工物生産過程と、それら二つのパターンつまり人工物や労働生産物としての記号-意味化されたものと人工物生産過程や労働過程としての記号-意味化するもの、によって構成されている。
- 2、この社会文化現象を生み出す母体を社会身体と定義する。つまり、社会身体は、過去の人間行為の産物、社会文化資源、つまり社会文化素材と社会文化様式を土台にして、それらを破壊、消費、活用しながら、現在の生活者や生活組織の生存に必要とされるものを再生産、生産、創造する等々の、社会文化資源の代謝活動を行っている。その過程の全てのプログラムは人工的言語つまりシンボル記号によって作られている。
- 3、もちろん、社会文化資源を構成する素材は、自然資源を使っているので、それらの物質は原子、分子、高分子系の記号言語つまりシグナル記号によって作られていることになる。しかし、この自然物素材と社会文化素材は同様な素材ではない。自然物素材に何らかの労働力が加わり、それらを加工し、そして人間社会での使用価値を所有することで、それらは社会文化素材となる。その意味で、シンボル記号による自然物素材の加工過程が人工物生産過程であると言える。
- 4、この事から、社会身体は言語によって、もしくは言語のように、構造化されていると言えるのである。この事を社会身体の基本的な構造に関する公理と考える。
- 5、社会文化現象は、社会文化資源のみでなく、それを活用する生活主体や社会主体の行為によっても作られているので、社会身体は、その定義から、これらの生活主体や社会主体を生み出す母体であると言える。この生活主体である人間の行為も、言語によって、もしくは言語のように、構造化されていると言える。
- 6、しかし、人間の行為を動物行動学の公理系の中で理解しようとする方法もある。例えば、人は有機化合物を中心にして作られている生物体である。その意味で分子や高分子を土台にして生物的身体を構成する神経、免疫、遺伝子、ホルモン系、酵素系等々の生理反応は、他の生命体と同じように原子、分子、高分子、遺伝子、細胞、器官系の機能を支配する記号言語つまりシグナル記号によって作られていることになる。これらのシグナル記号によって生じる行動は、生理的反射、本能的行動や身体反応と呼ばれるものである。これらの行動や反応は他の動物の行動

と共に通する。そこで、人間的行為を動物行動学の延長線上で理解しようという考え方がある。これらの人間科学は、この動物行動学や生物学の分野に人間学を想定していたと言える。

7. しかし、動物行動学の延長線上に人間の社会文化的行為を説明することが可能だろうかと問いかけるまでもなく、人間的行為は文化や社会の環境に決定されている。つまり、過去の人間行為の産物、社会文化資源、つまり社会文化素材と社会文化様式、人工物生産物によって決定付けられている。その決定付けを遺伝子のどこかに探しめてようとする試みもある。しかし、それらの試みには、これまで、言語活動の身体的意味について研究された成果が継承されているように思えない。例えば、色や音の感覚や知覚について、それらは生理的なものというより文化的なものであると理解されたとき、人間に於ける身体性が生物的である要素と同時に文化的であるという要素を否定できないことを念頭に入れなければならぬ。つまり、その文化的身体性こそ言語に決定され構造化された身体なのである。
8. 人間の観念形態は、社会身体のプログラム用語であるシンボル記号、つまり言語によって構造化されて、その固体保存と種族保存の生物的法則を補足する。これが人間の姿である。その意味で、人間は動物行動の原則、本能を文化や社会として、その個体の外に外化し、それをその個体の行動を決定付ける環境として、生存することになる。つまり、外化された個体の行動の規範が文化や社会のシステムであり、それをここでは社会身体といった。そして、その社会身体の規範によって行動する個体のプログラムを所有するものを自我と呼んでいる。自我は、文化や社会の観念形態によって構成されていることになる。
9. つまり、社会身体の観念形態、つまり社会身体を機能するプログラムによって形成された生活者個人の生活行為のプログラムを自我という。それらは社会身体のプログラム用語であるシンボル記号によって作られている。その意味で、自我を構成する意識、前意識や無意識は言語のように、もしくは言語によって構造化されているという有名なラカンのことばを理解できる。

3-2、人間社会学基礎論としてのシステム言語学の課題

1. 社会身体は言語のように構造化されている、もしくは社会身体は言語によって構造化されているという公理が成立するなら、人間社会学の基礎論として言語学が位置する筈である。つまり、社会身体の解説が人間社会学の課題であるなら、その人間社会学の基礎論として言語学は、社会身体の在り方を説明できるものであると考えられる。つまり、社会文化情報ばかりでなく、社会文化資源やそれを活用する社会主体の行為の言語構造的な在り方を説明できるものでなければならぬ。
2. 認識運動の過程を現象学では内的世界の外化と外的 world の内化の回帰構造として語った。これは社会身体化と自我化の相互形成過程を示すものであり、自我が社会身体のプログラムによって形成され、かつ社会身体の運動過程に参加すること

や、また社会身体は自我の活動の生産物であり、その生産物の構造が自我の環境となることを示している。我々が社会的規範や文化的環境に規定される存在であると同時にその社会的規範や文化的環境を再生産、破壊そして創造する存在であることを意味している。この現象学的な解釈の地平は、システム言語学的な解釈を加えるなら、言語活動の形成過程もしくは観念形態過程と人工物生産行為過程もしくは労働過程の回帰運動と理解することができた。

- 3、さて、言語活動の形成過程もしくは観念形態過程について我々はソシュール言語学とフロイト精神分析学の二つの公理系を活用しながら展開した。そして、フランス語表現方法の具体的な事例を例に取りながら、ランガージュのモデルからシンボル過程にモデル、そしてラングの論理形態のモデルに至る過程を、第一過程から第二過程への形成として、また、ランガージュの要素の結合モデルとして展開している。この言語学研究を今後も展開しながら、システム言語学のモデルが、所謂、論理や情報理論で語られる言語モデルを含み展開していることを示すことも、システム言語学の課題に入っている。
- 4、さらに、システム言語学の仮説は、吉田民人の人工物システム科学の援用によって成り立っている。この吉田の理論には、プログラム科学が前提にされている。そこで、プログラム科学の基礎理論としてシステム言語学が成立しなければならない。この課題は、既に、社会文化現象を構成する三つの要素、つまり社会文化資源、それを活用する主体とそれら二つの意味・記号のパターン、を作り出すプログラムについての議論を行っている。
- 5、人間社会学基礎論としてのシステム言語学は、科学のための科学から生活主体のための科学の確立を目指す試みが込められている。その意味で吉田民人のプログラム科学の思想を前提にしている。その生活主体の科学とは生活重視を思想に基づく科学技術の成立である。つまり、システム言語学はシンボル記号のプログラム科学基礎論として、それらは生活重視を課題にした人間社会学の形成、生活システム論の基礎理論となると言える。

3-3、システム言語学の科学性の点検

- 1、システム言語学の成立過程を構成した科学的方法論を摘出しながら、問題を整理する必要がある。
- 2、まず、言語学研究は具体的にフランス語表現方法を伝統的な語学や言語統計にしたがって分析し、意味論や統辞論的な分類方法を活用して、表現方法の研究を実証的な方法を用いて進めた。
- 3、この語学的展開は限界に達し、そこで、ランガージュからラングへの展開を理解する理論が問われた。そこで、ソシュール言語学とフロイト精神分析学の二つの公理系を活用しながら展開しシステム言語学の仮説を出した。その意味で、このシステム言語学は構造主義的な言語解釈が土台になる。
- 4、また、社会身体の言語構造は現象学的な解釈の地平を継承しなければならない。それは、社会身体化と自我化の相互形成過程の回帰運動、つまり言語活動の形成

過程もしくは観念形態過程と人工物生産行為過程もしくは労働過程の回帰運動と理解することである。

- 5、さらに、システム言語学の仮説は、吉田民人の自己組織系の情報科学の理論を一般化した、情報界と資源界からなる人間社会のすべてを対象とするシステム論、つまり人工物システム科学の援用によって成り立っている。この吉田の理論には、はじめにシステム論的回帰運動を提起するために活用した現象学的直観とは異質の実在論が前提になっている。この実在論を前提にして、ランガージュとラングの回帰運動のモデルで提起する、社会文化活動領域を支配する自己組織運動、生命活動領域を支配する自己組織運動、物理・化学的活動領域を支配する自己組織運動の三層モデルがある。さらに、実在論を前提にして社会文化資源の概念が成立しているのである。吉田民人の人工物プログラム科学論を貫く実在論の認識論的意味を問いかける必要がある。その現象学批判の哲学的意味を理解する必要性がある。
- 6、このように、幾つかの異なる科学性を活用しながらシステム言語学は成立していった。この過程を考える時、人間社会学基礎論としてのシステム言語学が成立するためには、その科学性に含まれる認識論的課題を検討しなければならないことが理解される。